



日中関係が厳しい今こそ、 青少年・文化交流を止めてはならない

伊佐進一衆議院議員が訪中を報告、
「顔の見える交流」の大切さを改めて訴える



日中関係が極めて厳しい状況にある中、中道改革連合の伊佐進一衆議院議員ら超党派の国会議員団がこのほど中国を訪問し、中国側要人と率直な意見交換を行った。

伊佐氏は2007年から2010年まで、在中国日本国大使館一等書記官として北京に駐在。さらに、それ以前の2002年には、中国各地を約3カ月にわたりバックパッカーとして旅するなど、中国との縁は深い。

今回の訪中で伊佐氏が中国側に提案したことの一つが、「青年交流」「文化交流」の再開だった。日中関係が厳しい今、なぜ交流を続ける必要があるのか。帰国後に自身

のYouTube番組で語った内容や、これまでの発言、さらに2018年に日本僑報社「忘れられない中国滞在エピソード」企画に寄せた特別寄稿「バックパッカーと日中関係」の内容をもとに、その思いを一問一答形式で紹介する。

——今回、日中関係が非常に厳しい時期に中国を訪問されました。なぜ今、直接中国を訪れ、対話する必要があると考えたのでしょうか。

伊佐進一（以下、伊佐） 日中間には現在、さまざまな難しい問題があります。しかし、関係が厳しいからとい



第1回「忘れられない中国滞在エピソード」コンクールで特別賞を受賞し、表彰式で挨拶する伊佐進一議員

って対話そのものを止めてしまえば、相互理解はさらに難しくなります。立場や意見が違う時だからこそ、実際に会って、率直に話し合うことが重要だと思っています。

——8月27日には、中国共産党中央対外連絡部の陸慷副部長と約2時間にわたって会談されました。

伊佐 双方の立場には大きな隔たりがある問題もあります。それでも、直接顔を合わせて意見を交わすことには意味があります。関係を改善していくためにも、まず対話を続けられる環境をつくっていかねばなりません。

——今回の訪中で、特に「青年交流」と「文化交流」の再開を提案されたことに注目しています。

伊佐 政府間の関係だけでなく、経済、文化、青年など、幅広い分野で交流が厳しい状況になっています。しかし政治や外交上の問題があるからといって、民間交流や若者同士の交流まですべて止めてしまうべきではありません。むしろこういう時だからこそ交流が重要だと思います。

——伊佐さんは以前から「顔の見える関係」の重要性を強調されていますね。

伊佐 政治や外交では、どうしてもさまざまな問題が起きます。そうした時に大切なのは、相手の国に実際に知っている人、友人がいるかどうかだと思います。

日中間で何か問題が起きた時、「中国」とか「日本」という大きな言葉だけで相手を見るのではなく、中国人の友人、日本人の友人の顔が思い浮かぶ。そういう関係があれば、一面的な情報や偏見だけに流されにくくなります。

——特に青少年交流が重要なのはなぜでしょうか。

伊佐 若い時に実際に相手の国を訪れ、人々と出会った経験は、その後の人生にも長く残るからです。

自分の目で見て、自分の耳で聞いて、実際に相手と話す。そうした体験によって、ニュースやインターネットだけでは分からない相手の国の姿が見えてきます。

若者同士が直接交流し、互いに友人をつくっていくことは、長い目で見れば日中関係の大切な基礎になると思います。

——伊佐さんご自身にも、若い頃に中国を長期間旅した経験があります。

伊佐 2002年、米国の大学院で中国について研究していた頃、「自分の目で中国を見てみたい」と思い、中国を訪れました。約三カ月間、バックパッカーとして列車やバスを乗り継ぎながら、さまざまな地域を旅しました。

その後、北京の日本大使館に勤務していた時にも、時間があれば地方を訪れました。そうした経験を通して、中国の人々の「優しさ」と「逞しさ」に直接触れることができました。

——その体験は、二〇一八年に日本僑報社の「忘れられない中国滞在エピソード」企画へ特別寄稿された「バックパッカーと日中関係」にも詳しく書かれています。

伊佐 中国を旅していると、本当にいろいろなハプニングがありました。言葉が十分に通じなかったり、どうすればよいか分からなくなったりした時にも、多くの中国の方々に助けられました。

敦煌では、ある料理店のご主人に本当にお世話になりました。そうした一つひとつの出会いは、今でも忘れることができません。

——寄稿を読むと、そうした中国の人々との触れ合いが、伊佐さんの日中関係に対する考え方の原点になっていることが伝わってきます。

伊佐 国と国との間には、いろいろな意見の違いや問題があります。しかし、それによって、実際に出会った中国人の友人との間に築いた信頼や、その人から受けた「優しさ」まで変わるわけではありません。

実際に相手の国へ行き、人と出会うということは、それだけ大きな意味を持っていると思います。

——まさに「百聞は一見にしかず」ですね。

伊佐 相手の国をニュースだけで知ると、実際にその国を訪れて、一緒に食事をし、語り合い、時には困った時に助けてもらうのとでは、相手を見る目は大きく違ってきます。

政治情勢は変化します。しかし、人と人との間に築いた信頼や友情は、そう簡単になくなるものではありません。

——日中両国は「引っ越しできない隣人同士」ともおっしゃっています。

伊佐 日本と中国は隣国です。この地理的な関係は変わりません。当然、意見が一致しないこともあります。だからこそ、違いがあることを前提として、それをどう調整し、地域の平和と安定を維持していくのかを考えなければなりません。

その意味でも、政府間の対話だけではなく、民間交流が非常に重要です。

——中友会も長年、日本語作文コンクールなどを通じて日中の青少年交流に取り組んできました。現在のように関係が厳しい時に、民間には何ができるでしょうか。

伊佐 政治関係が難しい時ほど、民間の交流のパイプを残しておくことが大切だと思います。

青年交流、文化交流、留学、ホームステイ、語学教育など、交流にはさまざまな形があります。文学や音楽、芸術を通じた交流もあります。

一人の中国人と一人の日本人が出会い、互いを知り、友人になる。一見すると小さなことかもしれませんが、その積み重ねが両国関係を支える大きな力になっていくのではないのでしょうか。

——最後に、これからの日中交流、とりわけ若い世代に期待することをお聞かせください。

伊佐 日中関係には良い時もあれば、厳しい時もあります。しかし、そうした時々の政治状況だけで、人と人との交流まで途絶えさせてはいけません。

特に若い皆さんには、機会があればぜひ相手の国を訪れ、自分自身の目で見て、人々と直接話してほしいと思います。

日中関係が厳しい今だからこそ、対話を止めない。青年交流を止めない。文化交流を止めない。そして、「顔の見える関係」を次の世代へつないでいくことが大切だと思います。

編集後記

今回の伊佐進一氏の訪中報告と、2018年の特別寄稿「バックパッカーと日中関係」を重ねて読むと、一貫して浮かび上がってくる言葉がある。それは「実際に会うこと」、そして「顔の見える関係をつくること」である。

日中関係が困難な時だからこそ、青少年交流、文化交流、そして民間交流の灯を消してはならない。

一人と一人が出会い、語り合い、互いを理解する。その小さな積み重ねを絶やすことなく次の世代へつないでいくことこそ、日中両国の未来のために、私たち民間が果たすべき大切な役割ではないだろうか。

(中友会通信編集部)



伊佐 進一 (いさ しんいち)

1997年東京大学工学部航空宇宙工学科卒業、科学技術庁に入庁。2003年米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)で修士号を取得。2005年文部科学省・宇宙開発利用課課長補佐に就任。2007年在中国大使館一等書記官に就任。2010年文部科学省副大臣秘書官に就任、2011年同省退職。

2012年12月 第46回衆議院議員総選挙にて当選 (1期目)

2014年12月 第47回衆議院議員総選挙にて当選 (2期目)

2017年10月 第48回衆議院議員総選挙にて当選 (3期目)

2018年10月 財務大臣政務官に就任 (～2019年9月)

2021年10月 第49回衆議院議員総選挙にて当選 (4期目)

2022年 8月 厚生労働副大臣に就任

2026年 2月 第51回衆議院議員総選挙にて当選 (5期目)



伊佐進一議員受賞作品掲載

第1回「忘れられない中国滞在エピソード」受賞作品集

心と心つないだ餃子

ISBN 978-4-86185-265-7



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

こうべ

頭を上げて月を眺め、頭を垂れて鄧コーチを想う

医師 大岡 令奈



花園飯店プールでの練習風景（鄧先生撮影）

「床前名月光」で始まる李白の「静夜思」は私が生まれて初めて習った中国の絶句です。それを教えてくれたのは鄧先生。上海で私に水泳をコーチしてくれた向明中学の教師です。水泳はもとより、鄧先生からは人生の糧となる人としての姿勢を学びました。感謝の気持ちを込めてそれを紹介したいと思います。

プレッシャーなし

中国との関わりが始まったのは私が2歳のとき。父の上海駐在がきっかけです。90年代初期は上海でも外国人の子供が安心して泳げる施設は限られていました。日本人駐在員が使用できた唯一の室内プールが花園飯店にある25メートルプール。そこに、我々と同じマンションに住む一歳年上のナッチャンが鄧先生をお呼びして水泳を習っており、私も彼女と一緒に習い始めたのがきっかけです。先生は教練の資格を持つコーチですが、ご自身はプールには入らず常にプールサイドからの指導でした。

ただし、その指導が絶妙であったことは私が成人した

今になって一層感じるところで、鄧先生ならではの妙技が多々ありました。そのひとつは4歳の頃の事。今でもその情景は覚えています。鄧先生のもとで浮力補助をつけて練習を開始してから半年ほどを経て、いよいよ道具をつけずに泳ぐことになったときでした。大人用で足が立たないホテルのプールゆえ、浮力補助なしで泳ぐのを躊躇する私。手を離す勇気が出ずにいつまでもプール脇にへばりついている私の前で、先生はおもむろに自分のズボンのポケットから自宅の鍵束を取り出して何かいじり始めました。そうしているうちに、思わず鍵をプールに落としてしまったのです。「哎呀，怎么办！令奈是否能给我帮个忙？（わー、困った！ どうしよう。令奈、助けてくれるかい？）」。当時、現地上海の宋慶鈴幼稚園に通っていた私は、中国語がある程度わかるようになっていました。困った表情の先生を見て、私が思わずプールに潜ったのは言うまでもありません。プールの底から鍵を拾い、水面に浮かんで、片手でプールの壁につかまりながら、手をいっぱい伸ばして先生に鍵を渡しました。そんな私に先生は目を細めて大喜びで「谢谢，大岡令奈 你很棒！（ありがとう、大岡令奈はすごい！）」とほめてくれました。気が付くと浮力補助なしで水の中に浮かぶことができていた私がいきました。

先生のこの「鍵落とし」作戦に対し、見学していた母はもちろん、事の真意をわかっていたようですが、私は当時全く気づいていませんでした。それから数年後、同じプールで新しい小さい生徒に対して先生が例の鍵落としをしているのを目撃し、先生の作戦をようやく理解したというわけです。力づくではなく、プレッシャーを与えずに人を動かすことの妙技を学ぶ機会でした。

厳しさ共存の深い教育観

また、先生の練習は決して楽ではありませんでした。いったんプールに入ったらレッスン中に水から上がるこ

とは許されません。練習時間は初期の頃は1時間で、4種目ができるようになってからは一時間半でしたが、泳ぐ距離は増え続けても、プール壁につかまって深呼吸をしたら、またすぐ泳ぐというルールは徹底されていました。お陰で目標があるとき「楽」からは何も生まれないということを体得できたと思います。それに加え、鄧先生はプールに通う往復の交通手段について、私の母に、ある日提案をしたのです。母の記憶によると、それは次のような内容のものでした。「令奈のお母さん、ひとつ提案があります。今自宅から花園飯店のプールまでの往復は車での送迎ですね。外国人ゆえ慣れた運転手による送迎が安心だということは承知していますが、御一家も上海に来て1年以上過ぎ、かなり慣れてきたでしょう。所要時間は多少かかりますが、これから公共バスでの往復を検討してはいかがでしょうか？ バスの中で令奈は上海の人々を垣間見ることができ、令奈の中国理解にもつながります。そして何よりも令奈の水泳レッスンの準備運動として最適だと思いますよ」

鄧先生の教育的提案に賛同した母は、私の父にも相談の上、バスで通うことにしたそうです。それから週に一度911路線の黄色の二階建てバスが私のプールへの交通手段となりました。押し合いへし合いの状況を母も心配したようですが、それは思い過ごしでした。幼い私がいるとほとんどの乗客が私に席を譲ってくれ、「何歳？」に始まっていろいろな話しかけをしてくれたのです。それは心温まる感動の場面であったと、今でも母は事あるごとに口にします。加えて私は、911の2階部分に上がって街を見るのが大好きになりました。一番前の席が全面ガラスで、私にとっての特等席でした。もちろん乗客全員にとっても大人気の席でしたが、ありがたいことに子供の私が二階に上がると、他の乗客は大抵私をそこに座らせてくれました。先に他の子供が座っていると、その子の親が私を手招きして呼んでくれ、1つの椅子に子供2人で座って仲良く外を眺めるという具合でした。また2階から1階へのバスの階段はすこし螺旋状になっていたのですが、時としておじさんが私を抱っこして安全に下まで降ろしてくれたりもしました。バスの往復を通じて、私は街のみんなに守られているという安心感を得ていたように思います。

鄧先生は、毎回、バス往復は大丈夫かと聞いてくれました。私は、こんなことがあった、あんなことがあったと楽しく報告するのですが、その話を先生はいつも嬉しそうに聞いてくれました。暫くたって、改めて先生にバス推薦のお礼を伝えたことがありました。それに対して先生がつぶやいた言葉は今でも忘れていません。「バス

での体験が気に入ってくれて良かった。上海での体験が、『運転手つきの車で水泳のレッスンに通う』というだけでは、子供の令奈にとって最良という環境ではないと思った。厳しい提案だったかもしれないけれど、私の考え方が間違っていなかったと確信できた。バスを通じて令奈が上海を好きになってくれて嬉しいよ」。先生の深い教育観を幼いながらに感じた一瞬でした。

人を助けること

その後、小学4年生で父の帰任が決まり、私は8年間の上海生活を終えることになりました。

少し前に鄧先生の胃に腫瘍が発見され、手術後の療養をされている時期でした。もちろん水泳練習は休止していました。ただ帰国前に先生にお会いしたく、感謝会の提案をしたところ、先生は出席すると回答してくださいました。久しぶりに会場でお会いした先生はかなり痩せていて私は驚きましたが、話しぶりは前のとおり元気な声でした。

先生は私に2つのプレゼントを贈ってくれました。1つは大きめの黒色競泳用水着。もう1つは李白の五言絶句を書いたメモです。中国の小学校の教科書に取り上げられている有名な絶句ということで、一行ごとの意味を解説してくれた最後に先生は「挙頭望明月，低头思故乡」のところを「挙頭望明月，低头思令奈」と謳ってくれ、涙を浮かべながら頭を撫でてくれました。

鄧先生とは帰国後も手紙でやりとりを続けましたが、残念なことに、私が中学生のとき逝去されました。私は日本で通った中学校でも水泳部に所属し、先生にいただいた水着で練習を重ねました。その学校行事で大学の学部見学に行った際、医学部が私の印象に残りました。鄧先生のことがあったからかもしれません。私はそれから医師をめざし、一昨年に医学部を卒業して医師になることができました。勉強で苦しい時、励まされたのは先生から学んだ絶句のフレーズでした。「挙頭望明月，低头思邓老师（頭を上げて月を眺め、頭を垂れて鄧コーチを想う）」この絶句を糧にし、鄧先生のような方に一日でも健康で長生きしていただけるように医師の業を成していきたいと思っています。

大岡 令奈（おおおか れいな）

2歳で父親の駐在に伴い神戸から上海へ。宋慶齡幼稚園、上海日本人学校に在籍。10歳で父の帰任に伴い東京へ帰国。慶應義塾女子高に在籍中、父の北京駐在に伴い北京順義国際学校 International School of Beijing (ISB) 高等部に留学。慶應義塾大学医学部卒業。2016年より医師。

「私の中国物語」その②

私を変えた北京の夏

大学生 秋山 ひな子



2016年夏、天安門前にて。見渡す限りの空、中国の土地の広さに感動

2016年8月、私は初めて北京を訪れた。

大学1年生のとき、“OVAL JAPAN - Our Vision for Asian Leadership”という国際ビジネスコンテスト運営団体の北京大会に参加するため初めて大陸にやってきた。

10日ほどの滞在で外に出て観光したのは数日だけだったが、私が目にした中国は今まで知っていたはずかながらの私の知識の中の中国とは大きく異なっていた。

とにかく、とてつもなく大きくて人もたくさんいた。そして一番衝撃だったのが、中国ってまだ発展途中なのかという気付きだった。

ニュースの報道で中国はITが発展していて、日本よりも進んでいると認知していたし、私自身も北京は中国の首都できっと東京と変わらない景色なんだろうとどこかで想像していたのかもしれない。私が観光した日は、あいにく空気汚染がひどい日だった。そのせいもあるだろうが、まるで50年前の日本のように感じた。

また驚きだったのが、中国人が案外優しいことだった。タクシーに乗った時、私が日本人であることに興味を示して話しかけてくれたり、現地で知り合った中国人の友達がいいろいろサポートしてくれたり、嫌な思いは一度もしなかった。

北京から帰国して、数日なにか忘れ物をしたかのような心に穴が開いたような感覚だった。北京での写真を見返しては、あの刺激的な10日間を懐かしみ現状に物足りなさを感じていた。

大学の留学申請締め切りまで残り二週間になった頃、よし留学先を北京にしよう！と決めた。

正直すごく迷った。中国語は大学入学後、第二外国語として勉強し始めて、資格なども受けたことすらなかった。

そんな語学力で、北京の本科に混ざって勉強し、学位も取るなんてできるのか不安だった。でも、やっぱり北京に戻りたい、あの刺激的な環境にもっと浸りたい、中国を自分の目でもっとみて知りたいという、病みつきのようになったような感覚が、不安をはるかに上回った。

そして、2016年12月北京大学国際関係学院への双学位留学の切符を手に入れた。

私は、今まで苦勞のない人生を歩んできた。幼稚園から高校までの一貫校に通い、高校ではオーストラリアに留学し、親が敷いてくれたレールをひたすら歩いてきただけだった。だからこそ、大学受験は自分の実力で希望のところに行って自分の興味のある分野を探して、学問に専念したいと思った。第一志望は、少し都心から離れたカトリックの大学で、そのアメリカンスタイルな自由さと大学の学問レベルの高さに惹かれていた。しかし、大学受験は望み通りには行かず、結局第二志望の早稲田大学の国際教養学部に入學した。初めは不本意で入學した早稲田だったが、今は早稲田で良かったと心から思う。ある意味、こんなに中国と縁が深くて留学制度が整っている早稲田に入學していなかったら、きっと中国に関心もなかっただろうし、留学することもなかったのだろうなと思うと、早稲田への入學は、私の中国への興味を持つきっかけを与えてくれたのだと思う。

北京に来てからの日々は、想像通り毎日刺激に溢れていた。ある人が私に、北京の3カ月の変化は通常の一年の変化のスピードだと言ったが、まさにその通りだった。大学内は、常にどこか工事中で時間とともに変化が目に見てとれた。北京の流動性は速く、感動を覚えた。それから、なんと言ってもITの急速な発展とともに日常生活において日本より断然便利に感じることが多い。日本では現金主義だった私にとって、オンライン決算やオンラインショッピング、割り勘などの機能は画期的だった。

ただ同時に不便さも覚えた。携帯一つで何でもできる環境ということは、同時に携帯が使えないと何もできないということの意味する。私の使っているSIMカードの問題なのか結構頻繁にネットへの接続が途切れ、そう

すると会計の時に決済できず苛立ちを覚える時が度々ある。それから中国に来てから、中国人のスマートフォンへの依存度の高さに驚いた。WeChatでの会話を始めると、中国人の返信はすぐに返ってくる。日本人の感覚からしたら半日返信が来ないのは当たり前で、中国人からしたらそれはあまりにも遅いのだった。

そんな異文化での生活も早くも半年が過ぎ、春休みに日本に一時帰国してから北京の大学寮に戻った時には、家に帰ってきたような安堵感を感じるくらいまでには、中国の生活が当たり前になっていた。この半年を経て、中国人との交流、ボランティア活動、会社訪問、大学での授業や日常生活などで様々な経験をし、中国への理解は随分と深まったと思う。そして、私のSNSやブログを通じて中国への関心を高めてくれる周りの人も増えたように思える。しかし同時に、私が中国に来て危機感を覚えたのは、日本人の海外への関心の薄さだった。中国人は自国をはじめとして、日本やその他外国の情報に敏感で関心が高いように思う。そして日本人が思っている以上に日本が好きあるいは関心を持っている中国人が多いのだ。日本人が知っている爆買いだけでなく、日本文化や言語、礼儀など様々な分野で関心を持っている。一方日本人はどうだろうか？

少なくとも私の知る限り中国に関心を持つ人は限られている、そして溢れかえる中国関連のニュースを見ていたとしても未だに、中国はすごいよねと他人事でしか感じていない人があまりにも多いと感じる。これはとても

恐ろしいことだと思う。

今や中国の方が発展しているのにもかかわらず、日本に絶えず関心を持ち、来日する中国人が大勢いる中、日本人は隣の大国を俯瞰的に見て実際に中国を知ろうとする人が少なすぎる。そんな現状が続いたら日本は将来世界で張り合える権利も威厳も失ってしまう。そんな現状に対する日本の若者の危機感も壊滅的に低いと感じる。

中国の存在は、日本にとって今も昔も無視できないものだ。日中関係の改善は今後の日本社会にとって大きな鍵となるだろう。そうした中で、これから社会の中核になる若者はもっと中国に対する関心を高めるべきであると思う。私個人が社会全体に与える影響はわずかなものだが、私自身が周りの人に影響を与えて、それが連鎖的に広まっていけばいいと思う。

たった半年ほどの中国生活で多くを学んだ。留学も残り若干4カ月になり、今何を思うか。

やはり、将来は日本を拠点に対外的に仕事をして、中国と今後も関わりを持ち続けたいと思う。そして残りわずかな留學生活の中で、より具体的にその軸に沿って自分が活躍できる職業を見つけていきたい。

(2018年2月記)

秋山ひな子 (あきやま ひなこ)

神奈川県出身。幼稚園から高校まで横浜の私立一貫校に通う。中学高校時代3度オーストラリア・メルボルンに語学留学を経験、2016年早稲田大学国際教養学部に入學。大学1年の夏に訪れた北京の魅力に取り憑かれ中国留学を決意。2017年9月から一年間北京大学国際関係学院にて双学位留学。2018年7月帰国。

「私の中国物語」その③

きっかけをくれた遊學と友情

アナウンサー 濱田 美奈子

アナウンサーの採用試験で全国各地を受験したが内定がもらえなかった1992年の秋、私は傷心と疲労で東京から実家のある福岡に帰省していた。就職先が決まった同級生に会う気になれず、私は実家で部屋にこもって毎日、本や新聞を読んでいた。ある朝、地元新聞に「海外遊學生募集」という記事を見つけた。行きたい国と研究したいことを履歴書とともに提出し、書類選考後に面接があり10人が選出される。遊學期間は二週間で、費用は100万円まで負担してくれる。応募資格は、福岡在住または福岡出身の大学生と留學生だ。就職試験に失敗し、とにかく何かに認められたかった私は、迷わず応募した。行きたい国は中国と書いた。大学で劇芸術を専攻してい

たので、日本の歌舞伎と中国の京劇の比較研究を柱として、中国各地の芸能を学びたいと希望した。

中国を選んだ理由は2つある。ひとつは、実家が営んでいた温泉旅館に、私が中学生のころ、北京から15人ほどの卓球選手の代表団が来て長期滞在したことがあり、その時の交流がとても楽しかったからだ。私達は、旅館の遊技場で毎晩卓球のラリーをして遊んだ。日本語が全く話せない選手の人たちとのコミュニケーションは、少しの英単語とジェスチャー、それに中国語ハンドブックを見ながらの筆談だった。彼らとの卓球ラリーがきっかけで、妹は中学、高校時代には卓球部に所属し、インターハイの全国大会にも出場した。私は、卓球の腕前はさ

ほど上がらなかったが、いつか必ず中国に行ってみたくて強く思うようになった。もうひとつの理由は、遊学生募集の記事を見つける少し前に、地元新聞に中国語講座生徒募集の記事を見つけて、中国語を学び始めたばかりだったことだ。中国語を教えてくれるのは九州大学大学院留学生の羅明坤さん。肩にかかる黒髪が美しい30代半ばの女性だ。毎回講座が終わってからも私が積極的に彼女に話しかけていたこともあって次第に仲良くなり、プライベートでも会って話をするようになった。羅さんは結婚していて子どもがいた。彼女は小学生の息子さんを大連に住むご両親に預けて、夫の李さんと二人で日本に学びに来ていた。かわいい息子を預けて日本へ学びに来ている彼女には、強い覚悟を感じられた。私は彼女の生まれ育った町に行き家族と会ってみたくなり、大連の実家訪問も遊学プランに入れた。そして、羅さんも同じく遊学生募集の留学生枠に応募した。彼女は日本の歴史や文化を学ぶために宮城県や岩手県を巡るプランだった。

海外遊学生の応募総数およそ600人の中から、9人の日本人大学生と1人の留学生が選出された。選出された10人の中に、羅さんと私がいた。遊学へ出発までのおよそ3カ月間、羅さんと私は会う回数をさらに増やした。彼女は日本の歴史について調べていた。私は高校の日本史の教科書やノートを引っ張り出してきて、彼女の知りたいことを一緒に探した。私が知りたい中国各地域の演劇や流行歌、ファッションなどについては、羅さんが教えてくれた。彼女のおかげで、さらに中国が好きになった。

1993年3月、いよいよ出発の日がきた。私にとって人生初めての海外旅行だ。2週間で中国6カ所、上海・蘇州・杭州・北京・天津・大連の順に巡る。大連では羅さんのご両親と息子さんに会える。福岡空港を発って上海空港に降り立った。現地の通訳兼ガイドの女性が私の名前を書いた紙を掲げて迎えてくれた。彼女は明るく好意的で、私と初めて会った時から、メイナイツウ（美奈子）と呼んでくれた。そのおかげで私も拙い中国語で会話してみようと思えるきっかけをもらえた。上海では雑技を観て、団員のみなさんに直接お話を伺うことができた。幼いころから鍛錬の連続で、その努力は計り知れない。就職活動がうまくいかず落ち込んでいた自分が恥ずかしいと感じた。もっと努力しようと思った。そのほかにも、上海近郊で芸能の歴史を学べる博物館をまわった。上海から列車で移動した蘇州や杭州では、町の小さな劇場を見学させてもらったりした。下手な中国語で話しかける私に、出会う人たちはみな親切で優しくかった。杭州から列車でふたたび上海に戻り、飛行機で北京へ移動した。北京では京劇俳優の方々に会うことができ、インタビューするチャンスにも恵まれた。男女ともにとにかく華やかで姿勢がよく、スターそのものだった。緊張して



北京京劇院公演前、楽屋にてインタビュー取材時（1993年）

質問したいことを忘れてしまい、鞆から慌ててノートを出す私に、「あなたは京劇のメイクが映えそうな顔ね！」と場を和ませてくれたりした。この遊学のメインテーマでもある歌舞伎と京劇の比較研究に必要な質問をたくさんできた。直接話を伺ってから観る公演は一段と魅力的だった。北京滞在中には万里の長城にも出掛けた。上りと下りで行き交う人たちの国籍はさまざまだったが、互いに笑顔であいさつし合うのが心地よかった。すれ違った時に、言葉がなんとなく通じる程度のコミュニケーションでも、私にとって刺激的で好奇心をかきたてられるものだった。北京から天津へ移動して劇場や市場をまわり、そして、遊学の最終滞在地の大連に着いた。ようやく羅さんの家族に会えた。「初めまして、森美奈子です。お会いできてとても嬉しいです」とたどたどしい中国語で挨拶をした。彼らは笑顔で家に招き入れてくれた。寡黙ながら優しい眼差しのお父さんと陽気で話し上手なお母さん、そして人懐っこくてかわいい彼女の息子の淵くん（マントウ）。食卓には、肉入りの饅頭や胡瓜のスープ、水餃子などの昼食が並べられていた。初めて食べる中国の家庭料理は、感動的な美味しさだった。「ヘンハオチー（とても美味しいです）」と伝え、お母さんは喜んでくれてどんどん皿におかわりを載せてくれる。気がつけば、私はマントウを10個以上食べていた。私はただただ「謝謝」と繰り返した。中国語が堪能ならもっと感謝の気持ちを伝えられるのにと、もどかしかった。大連から日本へ帰る時、3人は見送りに来てくれた。お母さんが「美奈子はもう1人の娘だと思っているわ。また必ず大連に会いに来てね。マントウ作って待ってるからね」と言ってくれた。「中国語をもっと勉強して、またいつか必ず大連に遊びに来ます」と彼らに約束して帰国した。

卒業論文を出さずに大学に残り、私は2度目のアナウンサー受験をし、地元福岡の民間放送局のアナウンサー

になることができた。入社2年目にはユニバーシアードが福岡で開催され、中国からの取材陣の案内や選手達の取材をするチャンスも巡ってきた。仕事の合間に中国語の練習も続けていた。羅さんとは、就職してから会う回数がだんだん減った。その間に、彼女のご両親は亡くなってしまった。もう一度大連に会いに行くと約束したのに果たせなかった。このことがきっかけで、羅さんと再び連絡を取って会うようになった。彼女は仕事をしながら勉強を続けて、日本で大学教授になった。私は、2人の子どもを出産して、子育てに専念するため局のアナウンサーを一度辞めたが、子ども達が幼稚園に上がるころ

に仕事復帰し、今もアナウンサーとして働いている。羅さんは今でも、会うたび私に刺激とやる気を与えてくれる。この春、彼女から「美奈子さんも大学の先生になるために大学院で学んだらいいと思いますよ」と提案された。47歳の私は、新しい夢を叶えるため、彼女と二人三脚の勉強が始まった。

濱田 美奈子（はまだ みなこ）

1994年3月共立女子大学文芸学部芸術科専攻劇芸術コース卒業。同年4月RKB毎日放送株式会社入社、アナウンス部配属。1998年2月退社後、同年9月フリーランスアナウンサーとして活動開始。現在、RKB毎日放送ニュースアナウンサー、アナウンススクール講師、司会・講演会講師・ナレーション、中学校・高等学校放送部指導。オフィス温声代表。

「私の中国物語」その④

和平飯店の夜は更けて

フリーランス・ライター 中瀬 のり子

様々な外国文化が持ちこまれ、かつてアジア随一の国際都市として栄えた街、魔都・上海。多くの映画やドラマの舞台、モチーフになったこの場所は、黄浦江を挟んで過去と現在、上海を象徴する異なる顔を持つ。浦東エリアの顔である陸家嘴には近未来的な超高層ビルが林立し、原色のネオンが煌めく夜の様は、さながらSF映画の未来都市のようで訪れる者を魅了する。川の向こう側、浦西エリアの外灘には、瀟洒な洋館や歴史的建築物、高級ブランドショップが立ち並び、クラシカルで優雅な雰囲気漂う。ドラマチックな時代と数々の映画のシーンに思い馳せれば胸躍る。対照的な二つの「上海の顔」を眺めることができるこの場所、外灘は私にとっても特別な場所だ。

「タクシーが下で待っているよ、さあ、急いで」

階下のガードマンからの知らせを受け、私は娘に靴を履くよう促してから家中の施錠を小走りで確認して回る。上海の住居は広く、玄関のインターホンまでもちょっとした距離だ。慌てて受話器を取るころには、せっかちな中国人運転手や配達員は立ち去ってしまうことも度々だった。

2008年4月、夫の転勤に伴って、私たち家族は中国・上海市に暮らし始めた。浦東地区の日本人学校から徒歩5分ほどの距離にある緑豊かでインターナショナルな雰囲気が人気のサービスアパートメント。言葉もままならないままに突然始まった慣れない異国での育児生活は大変なことも多かったが、住居のフロントやガードマン、掃除婦、庭師といった大勢の中国人スタッフたち、我が家の運転手や家政婦、娘の家庭教師、良き友人たちにも

恵まれ、にぎやかな上海生活を過ごした。そして、3年2カ月の月日が経過した2011年6月。翌月に本帰国を控えた私たち家族は、引っ越しの準備や挨拶で忙しい日々の隙間を縫うように、市内の観光スポットやレストランなどを訪れ、残り少ない上海生活を惜しんでいた。

その夜は外灘にある老舗のバーに数日前から予約を入れてあった。上海人ならずとも外国人居住者にも有名な和平ホテル一階にあるジャズバーだ。上海のシニア熟練プレイヤーたちが演奏するクラシックで重厚な雰囲気漂うライブハウスである。いつでも行けると思いながら一度も訪れないままに帰国日が近づき、初体験をしようと企画した週末のイベント。8歳の娘も子供ながらにこの日を楽しみにしていたであろう。

慌ただしく車に乗り込み、いざ外灘へと向かう。疾走するタクシーの窓枠の向こうにはメタリックな高層ビル群、猥雑な原色の看板、古い家々と突き出した竿にはためく洗濯物が、早送りの映画フィルムのように流れていく。東と西を繋ぐトンネルをくぐり、昔ながらの小区を抜けて川沿いの中山東二路へと出れば、そこはオレンジ色の街灯が灯りだすマジックアワーの外灘。ロマンチックに煌めく街、不思議な高揚感、魔法のかけられた時間。ここは誰もが憧れるおとぎの国のような場所だ。

さて、タクシーを降り、ホテルの中に入るとライブの準備をしているのだろう、楽器の音が聞こえてきた。店の受付で名前を告げると女性店員が夫と私に向かって言った。「お客様、大変申し訳ありません、お子様はご利用いただけません」

「ええ？ 予約したときに子供が一緒だけど大丈夫？

と確認したじゃない。大丈夫だと言われたから、今、こうして来たのだけど」

「大変申し訳ありません。それは受付した者の間違いです。本当にすみません」

大人たちのやりとりを聞いているうちに、娘の表情がみるみる曇っていく。娘は3年間の中国生活で基本的な中国語は解るようになっていたし、状況で察したのだろう。我が子の気持ちを思うと可愛そうだが、店員の彼女を責めても意味がない。分かりました、ではまたの機会にと答え、3人で店を出る。

「残念だったね」。そう声をかけると娘の目から、ついに涙がこぼれた。「コンサート、見たかった……」

「そうだね、また違うときに連れて行ってあげるから——」

とりあえずラウンジで一服してから、どこか他の店で食事を……。私たちは店を出てすぐのラウンジへ移動し、娘にはオレンジジュース、大人にはグラスワインを注文して座った。すると、開演時間を過ぎたのだろう、軽快なジャズの音が聞こえてくる。

「ここでも聞けるじゃない。よかったね!」

私は一人、おおげさな調子の声を出した。やけに楽しげなジャズの調べがしんみりとした三人の間を流れていく——。そこへ、さっきの女性店員が小走りやってきて、腰をかがめて娘に向き合うと、こう言った。

「お嬢ちゃん、おいで! お店の入り口で見ていいから。早く!」

事情が呑み込めずに両親の顔を交互に見る娘に向かって、私が言った。

「入口のところで見て大丈夫だって。行こう!」

娘はパッと顔を輝かせると椅子から飛び降り、店員と一緒に走っていく。私たち夫婦も目配せして二人の後を追いかけた。

ドアの一步向こうに入ったその瞬間、大きな音と人々の熱気に包まれた。光の当たったステージで品の良い老紳士たちが奏でる懐かしく温かなオールドジャズの旋律とリズム——。女性店員の彼女は娘の両肩に手を置いたまま耳元に何か話しかけると、私たち夫婦に一礼してからその場を離れた。私は会釈をし、夫はステージが見やすいようにと娘を抱き抱えた。娘はすっかり機嫌を直し、見よう見まねで手拍子を打ちながら、ステージに入っている。「ありがとう」。私は心の中でつぶやいた。とっさに機嫌を利かせた彼女と店のスタッフに感謝し、人の温かさを噛みしめた。そうして30分ほど入り口のドアの片隅で立ったまま演奏を楽しんだあと、私たちはそっと店を出た。

再び横浜へと戻った私たち家族は、娘が転入先の学校に通いやすいようにと山下公園の目の前の場所に移り住

んだ。中華街に隣接し、外灘とどこか似たこの街が以前にも増して好きになった私は、時々、霧笛の響く夕暮れ時の山下公園で海の向こうをぼんやりと眺める。あの頃、日本が恋しくなったとき、一人で外灘に来ては川辺でぼんやり景色を眺めた。そして、川沿いの道をずっと歩いた。ときには人目も気にせず大声で歌いながら、ただ、まっすぐに歩いた。無遠慮にじろじろと見たり、時折り話しかけてくる人がいても、もう気にならなかった。色々な人がいてもいい、ほおっておいてくれる上海の自由さと懐の広さ、人との距離感が私には心地よかった。車のクラクション、大声で話す人たちの声。喧騒の街を泳ぎながら浦東の家に着くころには、いつもの自分に戻れた。外灘散歩は私の中では一つのメディテーションだった。

あれから、ちょうど7年が経った。彼女はまだ、あの店で働いているだろうか?

いつか娘を連れてあのジャズバーを訪れ、お酒で乾杯をする。娘は細くて手足が長いから、チーパオが似合いそうだ。2人しておしゃれして行くのも素敵でいい。

「ほら、南浦大橋と東方明珠!」

ベイブリッジとマリンタワーを交互に指さして言う私に、呆れて笑う娘も今は高校生だ。上海での思い出話を繰り返す私に根気よく付き合ってくれる。

黄浦江に反射する陸家嘴のカラフルなネオンの色、ゆるやかなカーブに沿って続く優雅な洋館の佇まい。愛する上海、外灘。懐かしい街並みを思い描けば、温かなオールドジャズのリズムに乗って私の小さな夢も軽やかに舞う。愛する上海の人たちに、きっと、また会いに行く。

中瀬のり子 (なかせ のりこ)

夫の転勤に帯同した中国・上海生活を経て、帰国後はフリーランス・ライターとして活動。おうち中華料理&華流映画ドラマ愛好家。



2011年6月、和平飯店ラウンジにて。ジャズバーに入れず泣いたため娘の表情が不機嫌そう。この後、女性店員からのサプライズが……